



Title	令和二年度のオンライン授業に関する報告
Author(s)	久米, 裕子
Citation	中国研究集刊. 2021, 67, p. 112-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83262
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和二年度のオンライン授業に関する報告

久米 裕子

はじめに

新型コロナウイルス感染拡大にともない、京都産業大学では、春学期には、五月から十三週にわたって、全てオンラインで各科目計十五回の授業を実施し（十五回中、二回は土日にオンデマンド型授業を実施）、秋学期には、九月から十五週にわたって、一部の少人数クラスは対面で、残りの大半はオンラインで各科目計十五回の授業を実施した。また感染拡大防止の観点から、令和二年度は、学内での定期試験は実施せず、すべて授業期間内の課題等で成績評価をおこなった。

オンライン授業の実施形態としては、リアルタイム型授業、オンデマンド型授業、複合型授業の三種類がある。リアルタイム型授業は、オンライン会議システムを利用して、時間割どおりに同時双方向で授業をおこなう実施形態を指す。オンデマンド型授業は、時間割に制限されることなく、学生が自分のペースで取り組める授業実施形態のことで、たとえば動画コンテンツを提示するタイプと、ワードやパワーポイント等で作成した資料を提示するタ

イプの授業がある。ちなみに動画コンテンツには、パワーポイントに音声を加えて動画化したものと、オンライン会議システムを利用して講義風景を録画したものがある。複合型授業は、これらを組み合わせた授業のことで、たとえば十五回の授業の内、二回をオンデマンド、十三回をリアルタイムとするタイプや、一回の授業の前半をリアルタイム、後半をオンデマンドとするタイプ等が挙げられる。あるいはリアルタイムで実施した授業を録画して、これをオンデマンド教材として、リアルタイムで授業に参加できなかった学生に提供するタイプも複合型授業に含まれるかもしれない。

こうしたオンライン授業を実施するにあたって、京都産業大学では、長年、使用している「 Moodle」（以下、ムードルと表記）という課題提出システムに加え、令和二年の五月から導入された「Microsoft Teams」（以下、チームズと表記）を主なツールとした。チームズとは、「Microsoft 365（旧 Office365）」アプリケーション」（以下、マイクロソフト365と表記）の一部で、「Zoom」（以下、ズームと表記）とよく似たオンライン会議システムを備えた組織や企業向けの情報共有ツールである。オンライン授業でどのようなツールを使用するかについては教員に一任されていたが、筆者が所

属する文化学部では、学内でサポートが受けられる Moodle とチームズの使用を推奨し、授業開始前に、学部で両ツールの使用方法に関するFD研修会を開催し、オンデマンド型授業には Moodle を、リアルタイム型授業にはチームズを使用することが提案された。

以下、京都産業大学におけるオンライン授業に関する報告として、オンライン授業開始前の懸念事項、チームズの主な機能、オンライン授業の事例報告、オンライン授業のメリットとデメリット、について述べ、最後にオンライン授業の今後について言及したい。

一 オンライン授業開始前の懸念事項

①学内のシステムに関する懸念事項

〈セキュリティの問題〉

オンライン授業開始に当たって、まずは授業コンテンツに対する学外からの不正アクセスや、授業コンテンツの学外への流出等が懸念された。しかし大学から提供されたチームズは、セキュリティ面がしっかりしており、詳しくは後述するが、学内のアカウントと紐づけされているため、大学のメールアドレスを持たない外部の人間が簡単には入り込めないシステムになっており、その点において、教員たちに安心感を与えた(注1)。

すでに述べたようにチームズは、「マイクロソフト365」の一部であり、数年前から大学が「マイクロソフト365」の法人契約をしていたため、すべての学内関係者が有料版のチームズを無料でダウンロードすることができた。

〈学内サーバーとネット回線の問題〉

次に実際に授業を開始した際に、一人一人ほどの学生が一斉にアクセスした場合、大学のサーバーが果たして持ちこたえることができるのかということが懸念された。またそもそも日本全国の大学が一斉にオンライン授業を開始した場合、ネット回線の混雑状況がどうなるのか、まったく予想がつかなかった。文化学部では、学生が授業コンテンツにアクセスできない可能性を想定して、初回授業は時間割に縛られないオンデマンド型授業にすることを推奨した。またネット環境への極端な負荷を回避するため、授業コンテンツはできるだけ軽量化すること(パワーポイントはPDF化する等)を事前に申し合わせた。しかし実際には、大学のサーバーにつながりにくいというケースも見受けられたが、サーバーが完全にダウンして丸一日授業が実施できないというようなことは起こらなかった。

〈学生のパソコン環境の問題〉

最後に、学生が日頃どのようなデバイスを使用しているのか、果たしてオンライン授業を受講できる環境が整っているか、ということが懸念された。在学生については、各ゼミで手分けして確認をし、新入生についてはパソコン環境(ワイファイ環境を含む)に関するアンケート調査を実施した。結果、家族と共有のパソコンも含めれば相当数の学生がパソコンを所持しており、これにスマートフォンを加えると九割強の学生がオンライン授業を受講できる環境にあることがわかった。しかし数パーセントの学生はパソコンもスマートフォンも所有していない状況だった。そこで、大学からは、学生のパソコン環境の充実を目的に、全学生に対して一律五万円の補助金を支給した。なお文化学部では、一部、パソコンを持たない学生がいることを念頭に、スマートフォンだけでも受講できるように配慮するよう事前に申し合わ

せた。

②ソフト面での懸念事項

〈授業運営のルール化〉

成績評価や授業運営の方法がまちまちであると学生が混乱するので、これについても学部内でおおよそのガイドラインを作成した。たとえばリアルタイム型授業は、時間割どおりに配信されるが、オンデマンド型授業についても、原則として、時間割に指定されている開始時刻までにデータをアップロードするなどのルール作りをおこなった。またオンデマンド型授業、特に動画コンテンツを配信する場合、必ずしも九十分間の動画を作成する必要はなく、動画視聴後に課題に取り組み時間と合わせて九十分の授業とみなすことを話し合った(注2)。

〈双方向性の担保〉

オンライン授業は、教員側からの一方的な授業になりがちなので、学部の申し合わせ事項として、双方向性を意識し、特にオンデマンド型授業については、各課題について必ずフィードバックを行うこととした。

〈肖像権や著作権の問題〉

オンライン会議システムを使用する際には、学生に対して必要以上に顔出しを強制しないこと、学生の室内の様子等、プライバシーが写り込まないよう気を付けることについても申し合わせた。特にオンライン会議の様子を録画する際には、学生の了承を取るとともに、録画開始直前に注意喚起をおこなうこととした。また学生に対しても、著作権や肖像権の侵害につながる可

能性があるので、授業風景や動画を個々人で録画しないよう注意喚起をおこなうこととした。

著作権に関しては、大学から全教員にガイドラインが配布され、教員が授業コンテンツを作成する際には、著作権を侵害しないように十分に注意するよう学部内でも話し合った。

〈その他〉

授業によって使用されるツールが異なるため、学生が混乱しないように、各授業でどのツールを使用するのか、またどの実施形態で授業を進めるのか、特にリアルタイム型授業とオンデマンド型授業を組み合わせた複合型の授業では、リアルタイム回とオンデマンド回の日程を学生に対してしっかりと通達することを話し合った。

二 チームズの主な機能

チームズは、その名のとおり、各授業の担当教員と学生のチーム、各種委員会の教職員のチーム、学部・学科のチームなど、各種チームを作成し、チームごとに情報を共有できるシステムである。新規チームの作成は容易であり、チーム作成後にメンバーの登録をおこなう。授業のチームなど、参加者が多い場合は、事前に学生にチームコードを提示して参加してもらうか、あるいは管理者が授業登録者名簿をつかって一括登録することが可能である。なお繰り返しになるが、大学のアカウントを持っていない人はたとえチームコードがあっても参加はできない。

〈オンライン会議機能〉

チームズの主要な機能としては、オンライン会議機能が挙げられる。この機能によって、授業のリアルタイム配信ならびに学内の各種会議や説明会等を実施することができる。ズームを使い慣れていない人には、一部不便に感じられる仕様もあったが、ビデオ通話もしくは音声通話が可能であり（ビデオ通話においては自身の背景を隠す機能あり）、また各自のパソコンに保存されている資料を会議参加者に提示できる画面共有の機能もあり、オンライン会議に必要な機能は一通り備わっている（注3）。またスマートフォンにチームズのアプリをダウンロードすることで、画面表示は小さくなるが、パソコンが手元にない学生もこれによってリアルタイム型授業に参加できた。

〈ファイル共有機能〉

チームズは、オンライン会議開始前に、資料をアップロードしておくことや、会議終了後に資料を閲覧することができる。また各種資料はオンライン上で同時共同編集が可能であり、一つのファイルを数人で手分けして入力することができる。

〈掲示板機能〉

チームズの各チームのトップ画面には投稿欄があり、一つの投稿に対して、チーム内の全メンバーがこれに返信することができる。この掲示板機能を使って、学生に対して課題や連絡事項を掲示することができる。

文化学部では、学科のチームを作り、そのチームの掲示板が、オンライン授業期間における教員の情報交換の場となった。オンライン授業に関する問題点やパソコンの操作方法等の困り事などを掲示板に書き込むことで、パソコンに詳しい教員から回答を得ることができた。回答する側も、掲示板に書

き込むことで、複数の教員から同じような質問を受けることがなくなった。また新しく入手した情報や授業の事例報告なども次々と書きこまれ、非常に参考になった。なお文化学部では投稿（スレッド）が乱立しないように、講義科目・演習科目・語学科目等、授業の形態ごとにチーム内にチャネルを作る等の工夫をおこなった

〈チャット機能〉

チームズでは、オンライン会議中のチャットのやり取りは、会議終了後にすべて自動保存される。そしてこうした会議チャットとは別に、学内のすべての人とチャットでやりとりができるプライベートチャット機能がある。繰り返しになるが、チームズは学内のアカウントと紐づけされているので、特にアドレスを交換する必要もなく、たとえば面識のない受講生であっても、名前さえわかれば即座にチャットでやりとりを始めることができる。また任意のグループを作成してグループチャットをおこなうことも可能である。チームズのアプリをスマートフォンにダウンロードしていれば、スマートフォンでのやり取りも可能である。使用感は、スマートフォンで広く利用されているLINEとほぼ同じである。LINE同様、@マークをつけて、グループ内の特定の人に呼びかけることも可能である。既読の確認については、既読数だけでなく、誰が既読したかも分かる。そしてLINEのビデオ通話のように、グループチャットのメンバーとオンライン会議をおこなうこともできる。さらにLINEにはない機能として、入力ミスを修正する機能がある。

このチャット機能は、学生と連絡を取る以外にも、教員間のコミュニケーションツールとして大いに役立った。新学期開始前は、自粛期間のため対面の打ち合わせができず、膨大な量のメールが飛び交っていた。用件ごとに新しいメールが次から次へと送られてくるので、過去のやり取りを確認するに

は、その都度、メール検索をする必要があった。CCメールに至っては、複数の人が一斉に返信をするので、少し出遅れると議論が追えなくなっていた。ところがチャット機能の導入後は、チャット画面をスクロールするだけで、過去の議論をすべて確認できるようになった。またチャットでは一言二言のやり取りも成立するので、連絡事項の補足や訂正も簡単におこなうことができ、時間と場所を選ばない立ち話という感覚で使用できた。現在も、大学あるいは学部全体に関わる重要な連絡メール以外は、引き続きチャットでやりとりが行われている。

〈通知機能〉

チームズには、自分が所属するチームに何らかの情報が追加された際に、アイコンに通知が表示される。スマートフォンとも連動しているので、情報の見落としが少ない。

またチームズでは、オンライン会議のスケジュールを共有することができ、チームの管理者が授業や会議の日程を投稿すると、参加者に対して、大学で使用しているオフィス365メールから自動的に出欠確認メールが送信され、会議開始直前には会議開始の通知が来るため、非常に便利である。

〈フォームズとの連携〉

「Microsoft Forms」（以下、フォームズと表記）は、「マイクロソフト365」が提供するアンケート作成ツールで、アンケート以外にも小テストを作成して学生に解答させることもできる。アンケートに関しては、匿名と記名を選択でき、提出期限を設定することも可能である。小テストに関しては、解答者に対して自動的に正解や合計点数を表示したり、解答に対する解説やコメントを表示したりできる。フォームズの最大の利点は、アンケート

や小テストの作成が非常に簡単な点である。またチームズと連携している中で、学外の人がアンケートや小テストを開くことはできない。このほかアンケートやテストの結果を自動的に円グラフや棒グラフで表示されることや、データを簡単にエクセルにエクスポートすることもできる。なおフォームズには画像や文書ファイルを受け取る機能もあるので、課題提出システム的な機能をもたせることもできる。ちなみに作成したアンケートや小テストはすべて自動的に学内のサーバー上のフォームズに保存されるので、学生にはそこにアクセスするためのURLを提示するだけでよい。

〈ストリームとの連携〉

「Microsoft Stream」（以下、ストリームと表記）は、マイクロソフト365が提供する動画共有サービスで、動画を編集したり、字幕をつけたりすることができるだけでなく、チームズと連携して作業することができる。たとえばチームズを通じてリアルタイムで配信している授業を録画すると、それがそのままストリームに保存され、動画の公開範囲を設定することができる。公開範囲を設定することで特定の授業の履修登録者しか動画を閲覧できないようにできる。また個人で作成したパワーポイント動画やスマホで撮影した動画もストリームにアップロードすることで同様に公開範囲を指定できる。公開範囲を設定しないと、動画は学内全体に公開されてしまうので注意が必要だが、操作ミスによって学外に流出してしまうことはない。

三 オンライン授業の事例報告

〈講義科目〉

講義科目に関しては、春学期は、毎回の授業で動画コンテンツを提供した。動画作成の手順として、まずパワーポイントのスライドを作成し、次に一枚一枚のスライドに音声を吹き込み、最後に動画化をおこない、最後にこれをストリームにアップロードした。授業開始当初は、授業の内容をパワーポイントに落とし込む作業にかなり時間を取られ、そこに音声を吹き込む作業はさらに時間を要した。十五分の動画を作るのに、音声の吹き込みだけで、何時間もかかった。ただ、こうした作業を通じて、自身の授業の中身を見直し、手持ちの資料を整理する良い機会となった。また動画化されたパワーポイントには、一切の無駄が省かれているため、通常であれば九十分を要する内容が約半分の四十五分程度に収まる。そこで、動画を視聴した後の残りの四十五分については、毎回、授業コンテンツや配信状況に関するアンケート、学生の理解度を確認するための課題、次回の授業にむけての予習課題等に取り組み時間とした。なおこれらのアンケートや課題はすべてフォームズで作成した。そしてオンデマンド型授業では、最終課題として、例年であれば、ワード文書ないしは手書きでレポートを提出させていたが、令和二年度は、これをパワーポイント動画の形式で提出させた。このことよって学生に動画作成の手順を学ばせるとともに、動画作成の苦労を学生と共有することができた。

秋学期は、一つの講義科目については、春学期と同様に、動画と課題を提供するオンデマンド型の授業をおこなったが、動画作成にあまりにも時間がかかるため、もう一つの講義科目については、リアルタイム型授業をおこなった。ただし秋学期には一部対面授業を再開していたため、必ずしも学生は

リアルタイムでの受講ができないと考え、毎回の授業を録画し、授業終了後に、録画した動画を学生に提供した。講義科目に関しては、オンデマンド型授業でもリアルタイム型授業でも、いずれもパワーポイントを使った授業をおこなったが、スライドの枚数はほぼ同じであるにも関わらず、リアルタイム型授業の方は毎回九十分を要した。リアルタイム型授業は、パソコン画面の向こう側で学生が聞いていると思うだけで話がしやすく、言い間違えや言い淀みもあつたが、言葉を重ねて説明したり、余談をはさんだりすることができた。なおパソコンをネットに繋いでいるだけで、授業を聴いていない学生もいると想定されるので、リアルタイム型授業でも、毎回、出席確認のためのアンケートや課題を提出させた。

このように講義科目においては、パワーポイントを活用して、動画を提供するオンデマンド型授業と、リアルタイム型授業を実施し、リアルタイム型授業に関しては授業録画をして、リアルタイム型授業のオンデマンド化にも取り組んだ。ちなみにオンデマンド型授業の場合も、リアルタイム型授業の場合も、いずれも顔出しはしなかった。顔出しをすると、動画コンテンツの容量は大きくなり、リアルタイムで配信する際には通信量を圧迫する可能性があると考えたからである。講義科目における教員の顔出しについて、学生に意見を求めたところ、大半はどちらでも構わないとのことであった。

反省点としては、春学期は九十分の授業時間を確保することにこだわりすぎたため、必要以上に課題を出してしまった点である。たとえ三十分程度で提出できる課題であっても、いくつもの授業を履修している学生にとって、それが積み重なって相当の負担になっていた。そこで秋学期は、例年、九十分かけておこなっている授業内容が盛り込まれている動画であれば、それが時間的に短いものであっても、質的には保証されていると考え、課題はあくまで出欠（動画視聴）を確認するための簡単な課題にとどめた。

〈演習科目〉

春学期、一年生から四年生までのゼミに関しては、すべてリアルタイム型授業で対応した。いずれも各学年のレベルに応じた個人発表を中心とする授業で、令和二年度は、ワードないしはパワーポイントで作成した資料をオンライン上で画面共有をしながら発表するスタイルを採用した。一〜二年生のゼミについては、いずれも一度も顔合せをしたことのないメンバーシップであったため、学生同士が交流できるような、できるだけグループワークを取り入れた。毎回、四〜五人のグループをつくり、グループごとにオンライン会議をさせたり、グループごとにワード文書を同時編集させたりした。また提出された課題について、例年であれば口頭でフィードバックをおこなっていたが、パソコン画面越しの音声による解説だけでは伝わりにくいと考え、かなり時間を要したが、評価ポイントや修正ポイントをすべて文章化して返却した。

秋学期は、ゼミはすべて対面授業となった。しかしゼミ生の中には、基礎疾患や高齢者との同居を理由に引き続きオンラインでの受講を希望する学生がいたため、教室内の黒板やスクリーン等は使用せず、引き続きチームズの画面共有機能を使って授業をおこなった。そのため教室内の学生にも、各自が持参したスマートフォンもしくはノートパソコンを使って資料を閲覧してもらった。結果、対面授業を希望する学生は、教室内にいるにも関わらず、全員がスマートフォンあるいはノートパソコンを見つめながら授業を受けるという奇妙な情景になった。しかしチームズの画面共有機能を用いて、発表原稿を閲覧することで、教員はもちろん学生自身もその場で原稿の修正ができ、また発表者以外の学生も、具体的な修正ポイントを画面上で確認でき、たいへん便利であった。特に四年生の卒業レポート指導においては、毎年、発表原稿の印刷に時間を取られていたが、チームズの登場によって、印

刷は不要となった。

このようにゼミに関しては、春学期はリアルタイム型授業を実施し、秋学期は対面授業とリアルタイム型授業を同時並行でおこなった。ちなみに後者のタイプをハイブリッド式授業と呼び、ハイブリッドで対応できるよう、秋学期からは学内の全教室にビデオカメラと収音マイクが設置された。

反省点は、三〜四年生はゼミ生同士が顔見知りであり、すでに関係性ができていたため、授業運営は比較的やりやすかったが、一〜二年生は、グループワークをおこなっても、顔出しに消極的であったこともあり、音声のみやりとりが中心となったため、盛り上がりには欠けた点である。顔を知らない相手とオンライン上で会話をすることは、学生にとっては予想以上に難しかったようで、特に会話を切り出すタイミングが分からず、沈黙が続くこともあった。教員は一つ一つのオンライン上のグループワークに順次参加できたが、対面授業のように全体の様子を見渡すことができなかったため、タイミングよく会話を促すことができなかった。三〜四年生のゼミでも、通常の対面授業のように自由に意見交換できる雰囲気はなく、指名された学生が順次マイクをオンにして発言するという堅苦しい雰囲気になってしまった。顔出しの強要は好ましくないが、通信量への負荷をあまり気にせず、もう少し顔出しを推奨した方が、お互いにコミュニケーションが取れたのかもしれない。オンラインで一から関係性を築くには、さらなる工夫と時間が必要だと感じた。

〈語学科目〉

中国語の読解をおこなう中級クラスでは、毎回、授業の前半はリアルタイムで、授業の後半はオンデマンドで対応した。春学期は、すべての授業がオンラインであったため、例年のようなプリント学習は実施せず、スマートフ

オンを活用した中国語学習に取り組ませた。まずスマートフォンで中国語入力ができるように設定をさせ、中国語のピンイン入力や音声入力等の練習をさせた。またオンライン上で使用できる辞書や検索サイトを紹介し、中国語で書かれた辞書項目やネット記事を読ませた。そして長文読解の指導に加え、スマートフォン録音機能を使って、学生自身の発音を録音させ、それをLINEで提出させる等して、発音指導もおこなった(注4)。肝心の読解については、思い切って翻訳アプリを使わせた。「グーグル翻訳」や「LINE中国語通訳」等は使い物にならないが、中国の「騰訊」(Tencent)や「百度」(Baidu)の翻訳ツールはかなり有効である。また「DeepL」(ディープエル)というフリーソフト(有料版あり)もなかなかよかった(注5)。そして学生には翻訳アプリで下訳をさせて、その後、アプリの翻訳の不備を補って正確に訳すという課題を与えた。ほかのクラスでは翻訳アプリの使用を禁止するクラスもあったが、今、各種検索エンジンやSNSアプリにも翻訳機能が搭載されており、翻訳アプリを使わないのはむしろ不自然であり、それよりも翻訳アプリの問題点を十分に理解して正しく活用するスキルが必要であると考えた。

このように語学の授業では、まずリアルタイムで前回の課題のフィードバックや次回の課題の説明を行い、残りの時間を使って課題に取り組みせ、授業時間内に課題を提出させるということをおこなった。

反省点としては、翻訳アプリを使って一旦できあがった日本語訳を検証するという作業は、学生にとって思いのほか難しかったようで、もう少し段階を踏んで、丁寧に指導する必要があった。

四 オンライン授業のメリットとデメリット

〈オンライン授業のデメリット〉

学内で実施されたアンケートによれば、学生にとって、オンライン授業の主なデメリットは、通常の授業に比べて課題が多いこと、パソコン等を使う時間が長く疲労を感じること、友人や教員とコミュニケーションがとりづらいこと、である。このほか集中力が持続しない、スケジュール管理がうまくできない、オンラインをうまく活用できない、という意見も見られた(注6)。

まず課題の多さについて、課題には、ゼミの発表準備等、対面授業でもオンライン授業でも求められる課題と、出欠(動画視聴)を確認するため、ほぼ毎回の授業で求められるオンライン授業特有の課題がある。おそらく学生が問題視しているのは後者の課題であり、秋学期には、文化学部では、後者の課題については、あまり難易度の高いものを課さないようにすることを申し合わせた。

次に心身のストレスについて、オンライン授業期間中、大学側としては、学生が不利益を被らないよう、できるだけ多くの情報を提供したいと考えたが、そのことが結果的に情報過多を招き、戸惑った学生も少なくなかった。そしてその戸惑いをリアルに共有できる友人がいなかったため、孤独感を募らせた学生も多かったのではないだろうか。そして最大のストレスは、学生が情報の海の中で情報を見落とすと、それがすべて自己責任で片づけられる点である。一見、授業内容をしっかりと理解し、毎回の課題をきちんと提出している学生であっても、課題と各種情報の多さから、実際にはかなりのストレスを抱えており、心身に不調をきたすほどではないにしても、勉強に対するモチベーションがかなり低下しているというケースもあり、情報の発信の仕方にも工夫が必要である(注7)。

ただ学生は様々な不満を述べているが、オンライン授業という実施形態に対する不満は案外と少ない。資料を読み上げるだけで眠たくなった、理解できなかつたなどの声も聞くが、これらの授業はおそらく対面で受講しても、単調で難解な授業であり、それはオンライン授業という実施形態の問題ではなく、学生の意欲もしくは教員の授業デザインに原因があり、オンライン授業のデメリットとは言えないであろう。

〈オンライン授業のメリット〉

学内で実施されたアンケートによれば、学生にとって、オンライン授業の主なメリットは、自分のペースで勉強ができること、時間を有効活用できること、復習ができること、である。また先ほどとは逆に、オンライン授業の方が集中できる、ストレスが少ない、スケジュール管理能力やオンラインを活用するスキルが向上した、という意見も見られた。

まず自分のペースで勉強に取り組むことができ、また自宅から授業を受けることで時間を節約して有効活用できた結果、学生のオンライン授業への出席率（動画視聴率）および課題提出率は例年に比べて非常に高かった。もちろん中には、パソコンをネットに繋いでいるだけという学生もいたかもしれないが、対面授業においても、出席しているだけで、居眠りをしたり私語をしたりして授業を聴いていない学生はいる。少なくとも、オンライン授業では、学生は出欠（動画視聴）を確認するための課題に取り組んでいる分、学習効果があったのではないかと思われる。

次に学生がオンライン授業に一定の評価を与えていることについて、たとえば大人数の講義科目は、オンライン授業であれば、座席の位置によって黒板が見えにくい、周囲の私語が気になる、配布資料が行き渡るのに時間がかかる、というような困り事とは無縁である。動画コンテンツが提供されれば、

聞き取れなかった部分をもう一度聞き直すこともでき、ノートテイクが間に合わなかつた場合は画面を一時停止することもできる。そして何よりも時間がない場合は動画の再生速度を速めて受講することも可能である。

このほか、オンライン授業を通じて、読解力や文章力そして忍耐力が身に付いたという学生もいた。オンライン上に掲示されている文書をしっかりと読む、疑問に思った点はメールで問い合わせることが、コロナ禍で習慣化された。また例年、学期末のレポート提出が間に合わないという学生が後を絶たないが、筆者が担当した授業では、「事情によって締め切りに間に合わない場合は事前に連絡すること」という注意書きをしたところ、事前連絡があつた数名を除き、受講者全員が期日どおりに課題を提出し、あとからお願いをしてくる学生は一人もおらず、スケジュール管理能力の向上が何れも。学生たちは、ストレスに押しつぶされそうになりながらも、オンライン授業を通じてかなり成長しており、オンライン授業の教育的効果はかなり高いと言える。

一方、オンライン授業の大学側のメリットとしては、オンラインで授業を実施すれば、多くの学生を収容する大教室は必要なくなる。またオンデマンド型の授業を増やせば、各時間における開講授業数が減り、教室の取り合いもなくなる。

教員側のメリットとしては、オンデマンド型授業において、授業コンテンツは一度作成してしまえば、それを再利用することができる点である。動画コンテンツの再利用を教員の怠慢と言われるかもしれないが、大学の授業はただ単に動画を見せるだけでは成立しない。必ず学生には課題を与え、それに対してフィードバックをおこなない、最終的には成績評価をつけなければならない。ちなみに資料のみを提示するオンデマンド型授業は総じて学生に不評であつたが、資料提示型の授業でも、きちんとフィードバックのあつた授

業に対しては、学生はこれを評価している。つまりオンデマンド型授業の肝はコンテンツよりもフィードバックにあると言える。もっと言えば、従来の講義科目の対面授業は、一方通行になりがちだが、オンデマンド型授業に変更すれば、教員はよりフィードバックの方に力を入れることができるのである。

また学生と教員のコミュニケーションについても、令和二年度は、直接対面で話す機会は少なかったが、ビデオ会議やアンケート調査を通じて、例年よりも密にコミュニケーションを取ったように思う。特に学生とのオンライン面談は、時間と場所を指定してわざわざ大学で落ち合う必要はなく、遅刻もドタキャンもなくスムーズに実施できた。

さらに授業だけでなく、オンライン授業のツールを使って、学内における講演会や説明会等もリアルタイムで配信すると同時に、その様子を録画することが可能になった。講演会や説明会の様子を録画するに際して、自分が動画に写り込むことに強い抵抗感をもつ人は依然として多いと思われるが、これだけ録画コンテンツが一般化すると、その抵抗感も徐々に薄れてきている。またいくつかの条件がクリアされていけば、安心して写り込むことができる。その条件とは、一つは動画配信システムのセキュリティがしっかりしていること、もう一つは動画コンテンツが主催者によって一定の期間を過ぎたら必ず削除されること、もう一つは視聴者が情報モラルに従ってコンテンツの二次使用をしないこと、である。今後は、このような形での講演会や説明会の開催が主流になっていくであろう。

おわりに

令和二年度のオンライン授業は、新型コロナウイルス感染拡大のため対面授業が実

施できないということ、そのメリットやデメリットが十分に検討されないまま急遽始まった。そのため一部の教員や学生は、オンライン授業を対面授業の代替物として捉え、オンライン授業では対面授業の良さは再現できないと否定的な見方をする向きがある。確かに現在のオンライン会議システムでは、対面の臨場感を完全に再現することはできておらず、ましてや音声だけあるいは文字だけのやりとりでは相手の非言語メッセージを読み取ることは不可能である。

しかし一方で日頃から他者の非言語メッセージが気になりすぎるといふ学生は、かえってオンラインの方が人と話がしやすいと言っている。また顔が分からない人とはコミュニケーションが取りにくいと言いつつも、実際には各種SNSを通じて、会ったことのない人たちと交友を深めている学生も多い。

就職活動においても、オンライン説明会やオンライン面接というものがおこなわれている。中には、「オンラインだったため自分の良さを発揮できなかった」という学生もいたが、今後はオンラインで顧客に対応するという業務がますます増えると考えられ、「オンラインだからできない」というのは、今後の社会において自分は適応できないと宣言しているようなものである。ここで考えるべきことは、どうすればオンライン上でコミュニケーションが取れるかである。学生も教員も「オンラインではコミュニケーションが取れない」という思い込みから脱却し、オンラインというツールをもっと吟味するべきである。少なくとも対面によるコミュニケーションが最善のものと考えている限り、オンラインの良さは見えてこないであろう。

オンライン授業は、対面授業の代替物ではなく、対面授業とは別の新しい授業実施形態として捉えるべきである。大学は学生たちから例年どおりの授業料を受け取っている以上、通常の対面授業よりも劣る代替物で対応すると

いうことはあつてはならない。オンライン授業にはオンライン授業の良さがあり、対面授業では学ぶことのできないものを提供するのが教員の仕事である。

最後に、オンライン授業とは直接関係しないが、令和二年度の授業期間中に、最も困った事は、大学の閉鎖に伴い、図書館が閉鎖されていたことである。学生に大学図書館の資料を読ませることができなくなり、特に四年生の卒業レポートの指導は行き詰まりを感じた。春学期の途中から郵送サービスが開始されたが、往復の送料はすべて本人負担であった。中身を確認できていない資料に対して往復の送料を払うシステムは、学生にとっては利用しづらく、結果的に、インターネット上の資料に頼らざるを得なかった。文化学部では、オンライン上で利用できる資料について情報交換もおこなったが、結果的に学生に十分な資料提供はできたかどうか自信がない。秋学期から図書館が再開されたのは、本当にありがたかった(注8)。

以上、新型コロナウイルスの蔓延により、オンライン授業という新しい授業実施形態がにわか浮上してきた。新型コロナウイルスが収束するまでは、引き続きオンライン授業と対面授業の併用が続くと考えられるが、新型コロナウイルスが収束後も、おそらく同じような状況が続くのではないだろうか。というのも、現時点では多くの学生が対面授業を求めているが、コロナ収束後に、対面とオンライン、どちらでも選択できるとなれば、一定数の学生はオンライン授業、特にオンデマンド型の授業を選ぶと考えられるからである。学内で実施されたアンケートによれば、学生にもっとも評判がよかったのは、リアルタイムで授業を実施するとともに、それを録画した動画も提供する複合型の授業であった。そして単なるリアルタイム授業に対する評価はあまり高くなく、むしろ動画を提供するオンデマンド型授業の方が高い評価を得ていた。いずれも自分のペースで取り組めるタイプの授業である。特に講義科目についてはオ

ンデマンド型授業が適していると学生も考えている(注9)。今後は、担当教員の希望も取り入れつつ、必要に応じてオンライン授業を取り入れることで、高い教育効果が得られるのではないだろうか。オンライン授業という便利なツールを知った以上、全面的に対面授業に戻ることは難しいと思われる。

注

- (1) 当初、Zoomのオンライン会議システムは、いわゆる「Zoom爆弾」という外部からの侵入が問題視されていた。また動画を配信する際、ユーチューブの限定公開のシステムを利用する案もあったが、URLが流出した場合、誰でも閲覧が可能になってしまう。その点、チームズは、たとえURLが流出しても、学内のアカウントを持たない人物は閲覧ができないシステムになっている。ちなみ非常勤講師の教員にもアカウントが割り振られており、学外のゲストに対しても、アカウントを追加発行することができる。そしてZoomと同様に、オンライン会議の主催者から招待されれば、アカウントを持たない人も所定の会議に参加することが可能である。
- (2) 動画コンテンツについて、当初、文化学部では、三十分を越えるコンテンツは分割して配信することが望ましいとしていたが、受講生にアンケートを取ったところ、小分けにした方が取り組みやすいという学生がいる一方で、ひとまとめになっている方が取り組みやすいという学生もおり、それぞれにニーズがあることがわかった。なお筆者が担当した授業の受講生について言えば、一〜二年生は小分けを希望し、三〜四年生はひとまとめにすることを希望していた。
- (3) 授業でチームズを使い始めた当初は、チームズはZoomに比べてオンライン会議の参加人数や会議中に画面表示される人数が少なく、またブレイクアウトルーム

機能がない等の問題が指摘された。しかしこれらの点は、順次、改善されていっている。

(4) 学生に微信 (Wechat) のアカウントを作らせ、LINEではなく微信でやりとりすることも考えたが、個人情報等の問題もあるので断念した。

(5) 「Deal」は、ドイツに本社をおく言語AIシステムを開発する企業が開発した翻訳システムである。

(6) パソコンなどのディスプレイを使った長時間の作業が原因で、目や身体や心に影響のする不調をVDT症候群というが、学生が訴える不調を単なる愚痴として捉えるのではなく、具体的な対策を講じる必要がある。

(7) 教員によって、授業実施形態や使用するツールが異なり、課題についても、内容はもちろん、課題の掲示場所、掲示のタイミング、提出方法、締切日がすべて異なる。学生が情報を見落とさないよう、事務室や教員から個別に連絡をすることもあったが、最終的には情報の見落としは学生側の責任とされる。また対面授業における居眠りは教員側にも責任があると考えられるが、オンライン授業に集中できないのは学生側の責任とみなされ、オンライン授業は、対面授業に比べ、学生の精神的負担が大きい。

(8) 図書館が再び閉鎖された際、高校生から大学の一～二年生が漢文を学ぶことができるプラットフォームが欲しいと思った。漢文学習者のすそ野を広げる意味でも、ネット上で利用できる良質な入門教材や解説が必要ではないだろうか。

(9) 学生の選択肢を増やすという意味では、対面授業を同時配信する、いわゆるハイブリッド式授業が有効であるように思えるが、実はハイブリッド式授業は、対面の学生とオンラインの学生の両方に配慮するため、様々な制限の中、教員は自由に授業がおこなえず、負担が増える。授業内容もどっつかずになり、結果的に授業の質が低下する可能性がある。

久米裕子(くめ・ひろこ)

一九六八年生まれ。京都産業大学文化学部教授。専門は中国思想。共著に『懐徳堂知識人の学問と生』(和泉書院、二〇〇四年九月)、『教養としての中国古典』(湯浅邦弘編著、ミネルヴァ書房、二〇一八年四月)、主要論文に「寧波の土地の記憶・南宋末の思想家、黄震の足跡」(『京都産業大学論集人文科学系列』第四五号、二〇一二年三月)など。